【研究ノート】

青少年教育施設のボランティアが企画運営する教育事業が「社会を生き抜く力」に及ぼす影響

The influence the educational projects by which a volunteer in youth education facilities manages planning exerts on “Force to survive the society”

及川未希生　OIKAWA Mikio
国立妙高青少年交流の家
長谷川祐太　HASEGAWA Yuta
国立青少年教育振興機構教育事業部

要旨

本研究の目的は、平成 27 年度に及川によって報告された「岩手山ボランティア育成ビジョン」の社会的意義の考察に関連して、国立岩手山青少年交流の家におけるボランティアの組織キャンプの企画・運営体験の組織体制に着目することで、当該事業のどの要因が「社会を生き抜く力」の養成につながるのかを明らかにすることである。

情動知能尺度と自由記述を手がかりにボランティア自身が企画・運営を行う教育事業を対象として調査及び分析を行った結果、ボランティアがより主体的な運営ができる組織体制を用いることで、情動知能における「気配り」等の向上に繋がることが示唆された。本研究の結果から、岩手山ビジョンの次の段階である「持続可能な育成スキーム」を具体的に盛り込んだ岩手山ビジョンの改訂版の策定に寄与する知見が得られた。

キーワード

教育振興基本計画、情動知能、ボランティア育成ビジョン、国立青少年教育振興機構

Ⅰ．研究の目的と背景

１．はじめに

国立岩手山青少年交流の家（以下、「岩手山交流の家」と表記）では、施設で養成している大学生・高校生を対象としたボランティアの育成に着目し「岩手山ボランティア育成ビジョン（以下、「岩手山ビジョン」と表記)」を作成している[1)]。岩手山ビジョンは、平成 25 年６月に閣議決定された第２期「教育振興基本計画」における４つの基本方向性のうち「社会を生き抜く力の養成」の実現に向けた取組である。

及川は、平成 27 年度に岩手山ビジョンにおける「育成の起点」と「育成の継続」に関して、ボランティア養成に関わる教育事業を対象に調査を実施し、岩手山ビジョンを元に展開している教育事業の教育的効果について報告している[2)]。及川は、「How to ボランティア」と「体験活動支援セミナー夏」という２つの教育事業について、ボランティアとして参加した大学生・高校生を対象とした調査を行い、その結果として岩手山ビジョンで描かれている育成スキームは概ね効果的に機能していると述べている[3)]。

及川は、大きく２つの点を具体的に報告している。一点目は、「育成の起点」としてのボランティア養成事業「How to ボランティア」において、岩手山ビジョンで示された重点要素（「魅力的な体験プログラム」、「魅力的なボランティア仲間の存在」、「魅力的な指導者の存在」）が効果的に機能しているという点である。報告では、自由記述調査の分析からプログラムデザインの中で盛り込んだ体験プログラムの一つである「野外炊事」に関連する「魅力」を感じている記述が多く見られたことや、「先輩」に関連する記述の中で「冷静に立ち回る先輩がすごかった」などの「憧れ」や「頼りがい」を感じていることが推察できる記述が多く見られたことを根拠として報告している。また、情動知能尺度を用いて、参加者の心理的な影響における調査から、体験プログラムの魅力や先輩あるいは仲間と関わることによる教育的な効果についても併せて報告し、自由記述調査の結果を補足している。

二点目は、ボランティアにおけるフォローアップの事業である「体験活動支援セミナー」において、ボランティアが主体的な運営ができる組織体制を用いて教育キャンプを実施することで情動知能における「自己対応領域」等の向上が見られたという点である。この点においては、より実践的な教育事業の企画・運営体験が「社会を生き抜く力」に寄与する可能性のある新たな視点が得られたと報告しているが、一方で、「具体的な教育事業運営に携わる企画・運営体験を『持続可能な育成スキーム作り』に向けた方策の一つとして捉えるとすれば、プログラムから得られるどんな体験にその要素が含まれているのかを明らかにする必要がある」とも述べており、岩手山ビジョンが次の段階に発展していくための明確な課題を明らかにしている。

２．研究目的

本研究は、平成 27 年度に及川によって報告された「育成の起点」に着目した岩手山ビジョンの社会的意義の考察に関連して、国立青少年教育振興機構のボランティアが自ら企画・運営をする体験に着目するものである。及川の報告では、具体的な教育事業運営に携わる企画・運営体験における「プログラムから得られるどんな体験にその要素が含まれているのかを明らかにする」ことが次なる課題であると述べられている[4)]。「その要素」とは「社会を生き抜く力」の養成にどのように寄与するかということであると考えられる。

国立青少年教育振興機構におけるボランティア養成に関する先行研究は、及川らによる複数の報告がある[5)][6)]。及川らは、グループワークを中心とした学生交流キャンプが、大学生にどのような影響を与えるかについてヒューマンコミュニティ創成マインド[7)]を用いて調査を実施し、その結果としてリーダーシップ、プランニングおよびコミュニケーションの３つの能力が向上する可能性があることを報告している。「グループワークを中心とした学生交流キャンプ」とは、任意団体妙高ボランティアネットワークが主催した「第８回妙高ボランティアギャザリング」であるが、この事業は、国立妙高青少年自然の家でボランティア養成研修を受講したボランティアが有志で実行委員会を組織し、企画立案から運営までを担った宿泊型研修であった。及川らの報告は、学生が主体的に企画運営を行った交流キャンプの参加者を対象として調査を実施したものであるが、キャンプの内容として「活動プログラム企画体験」を主たるグループワークとして展開した取組であり、将来的に、参加者が主体的な自主企画立案を実施する能力に繋がる内容を含んだ交流キャンプであったと推察できる。また、言及はされていないが、企画運営する側も国立青少年教育振興機

構で養成された法人ボランティアであることを鑑みれば、交流キャンプを運営する側にこそ、高度な調整力が要求されると推察される。

及川らの報告は、国立青少年教育振興機構の法人ボランティアが企画運営を行った例を取り上げたものであるが、本研究の主たる目的である、「プログラムから得られるどのような体験がどのように『社会を生き抜く力』等に寄与する要素が含まれているのかを明らかにする」という点において重要な手がかりになると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、及川らの平成 24 年度の報告及び及川の平成 27 年度の報告をもとに、岩手山交流の家における法人ボランティア（以下、単に「ボランティア」という。）の組織キャンプの企画・運営体験の組織体系に着目することで、企画・運営を行うことで得られるどのような体験が「社会を生き抜く力」の養成につながるのかを明らかにすることを主たる目的とする。

なお、本研究で使用するデータのうち「支援セミナー夏」のデータについては、及川の平成 27 年度の報告で使用されているデータと同一である。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象事業の概要及び調査対象

本研究の調査対象として、岩手山青少年交流の家において平成 26 年度に実施された２つの教育事業の参加者を対象とした。対象事業は、平成 26 年８月に実施された、教育事業「体験活動支援セミナー夏」に参加したボランティア 26 名（19.4±1.2 歳）と平成 27 年２月に実施された、教育事業「体験活動支援セミナー冬」に参加したボランティア 48 名（19.5±2.3 歳）である。

「体験活動支援セミナー（以下、支援セミナーと表記する）」は、小学生向けキャンプの企画および運営において、事業の活動プログラムをボランティアがグループを組んで企画立案するプログラムである。１泊２日のキャンプを①第一日目午後（３時間）、②第一日目夜間（１時間 30 分）、③第三日目午前（３時間）に細分化し、各グループが細案を作成し実施する。企画立案のために、一ヶ月前と二週間前に準備のためのミーティングを実施した。ミーティングは、それぞれ日帰りで実施し、昼食を挟んだ４時間程度の日程で実施した[8）9）]。

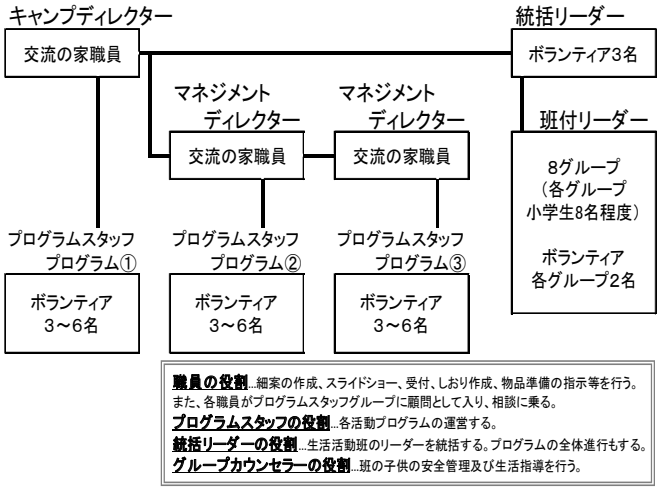

図１　体験活動支援セミナー夏の組織イメージ

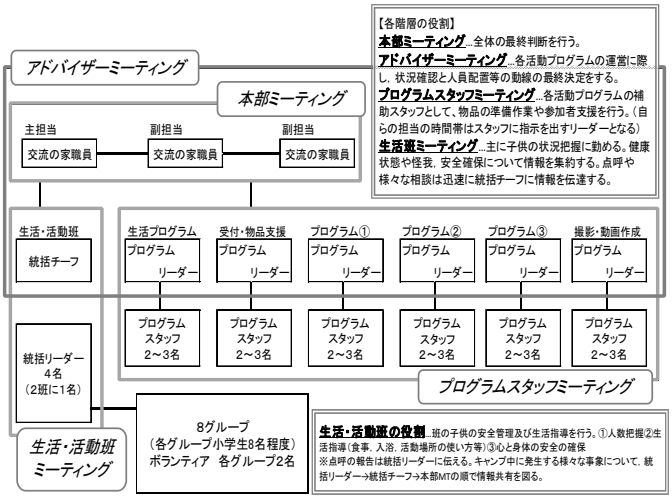

図２　体験活動支援セミナー冬の組織イメージ

本研究の目的を踏まえ、「支援セミナー夏」と「支援セミナー冬」において、ボランティアの参画形態を意図的に変化させた。支援セミナーの組織イメージを図１、図２に示す。「支援セミナー夏」では、活動プログラム単体をボランティアがグループを組んで実施し、つなぎ役として岩手山交流の家の職員を配置した。また、細案の作成などキャンプ全般のコントロールについては岩手山交流の家の職員が担う仕組みとした。一方で、「支援セミナー冬」では、つなぎ役の部分にボランティアで構成するアドバイザーミーティングを組織し、活動プログラム単体から、プログラム全体へ運営機能をボランティア側がより中核となる体制を敷いた。「支援セミナー冬」の組織体制は、「支援セミナー夏」と比較して、ボランティアが事業の中で担う役割が増加し、より主体的なものとなっている。岩手山交流の家の職員は企画運営の裏方として徹することで、ボランティアの主体性を引き出すことを主眼としたプログラムを構築した。

２．調査方法

岩手山ビジョンが目指す「社会を生き抜く力」を推し量る指標として、内山らが開発した３領域９因子 65 項目からなる情動知能尺度：EQS（Emotional Intelligence Scale）を使用した[10)]。EQS の質問項目と因子構造を表１、表２に示す。

表１　情動知能尺度の質問項目

1 感情的になった時でも自分がどう感じているかわかっている
2 自分の能力をわきまえ、イエス、ノーをはっきり言える
3 意味があって始めたことはともかく続けていきたい
4 目標達成のためなら苦労も気にならない
5 どちらにしようかという場合、自分で決断を下すことができる
6 気に障ったときでも声を荒らげない
7 自分で決めたことはやり遂げるようにしている
8 相手の喜ぶことをしてあげたくなる
9 人から悩みを相談されると、ひとごととは思えなくなる
10 相手の気分を害する発言はしたくない
11 災害に遭った人々のために何かしてあげたい
12 人を使うのがうまい
13 単なる八方美人ではなく、だれとでもつきあえる
14 だれにでも進んで手を貸してあげられる
15 ここぞという時にはきちんと発言する
16 何かを始める時は、うまくいくだろうと思う
17 その場の雰囲気を壊さないように気をつけている
18 集団を動かすことができる
19 必要に応じて新しい方法を提案することができる
20 状況の変化にうまく対応することができる
21 生活の場が変わっても自分の居場所が確保できる方だ
22 失敗しても平静でいられる
23 自分の感情の変化がわかる
24 今の自分の感情を言葉に表せる
25 一度始めたことは、最後までやり通したい
26 下積みの仕事にも意味を見つけていきたい
27 必要に応じて自分１人でものごとを決めることができる
28 その場面に応じて自分の感情を抑えることができる
29 三日坊主は最低だ
30 相手が喜んでいると自分も嬉しくなる
31 心から悩みの相談を受けることができる
32 相手の嫌がることは口に出せない
33 ボランティア活動に参加したい
34 人の能力を適切に引き出すことができる
35 苦手な人ともうちとけることができる
36 みんなのためなら嫌なことでもやる気になれる
37 決断が必要な時には迷うことはない
38 ものごとは全て良い方に考える
39 交渉ではあまり相手を怒らせることはない
40 みんなを引っ張っていくことができる
41 前例にとらわれず、改革を進めることができる
42 とっさの場合にも適切な判断ができる
43 新しい集団や仲間にすぐに溶け込む方だ
44 何事も相手の立場に立って考えるようにしている
45 自分の長所も短所もよくわかっている
46 仕事で先を読むのが得意な方だ
47 たかが遊びでも途中で投げ出したくはない
48 仕事をすることに深い意味を感じる
49 押す時は押すと、ものごとにはメリハリをつけている
50 嫌なことがあっても人にあたったりしない
51 目標のためなら、どんな困難でも乗り越える覚悟がある
52 どうすれば相手に喜んでもらえるかを考えたい
53 悩んでいる人を見ると声をかけずにはいられない
54 相手を傷つけることだけはしたくない
55 困っている人を見ると、何とかしてあげたくなる
56 人から仲裁を頼まれることが多い
57 人と親しくなることが苦手ではない
58 相手の話にはまず耳を傾けるのが礼儀だ
59 後輩や部下にテキパキと指示を下すことができる
60 「明日は明日の風が吹く」を実感することが多い
61 昔からのつきあいを大事にしている
62 会議の進行役を任されることが多い
63 状況の変化を予想して対策を立てる方だ
64 仕事の段取りを考えるのが苦にならない
65 状況に応じて自分をあわせることができる

米国の心理学者であるゴールマン（Goleman,D.）は、知能指数（IQ）で捉えられる知性が「考える知性」だとすれば、情動知能（EQ）は「感じる知性」であり、両者は人間にとって相互に不可欠なものであると述べている[11)]。また、メイヤー（Mayer,J.D.）らは、知能指数（IQ）に代表される知的な能力だけではなく、自らの感情に対する対応や適応などの情動能力が、対人間、あるいは、実社会で生じる複雑な事象にお

表２　情動知能尺度の因子構造

領域	対応因子	下位因子
自己対応（intrapersonal）	自己洞察（self-awareness）	感情察知（emotional awareness）
		自己効力（self-efficacy）
	自己動機づけ（self-motivation）	粘り（perseverance）
		熱意（enthusiasm）
	自己コントロール（self-control）	自己決定（self-decision）
		自制心（impulse control）
		目標追求（patience）
対人対応（interpersonal）	共感性（enpathy）	喜びの共感（sharing positive emotion）
		悩みの共感（sharing negative emotion）
	愛他心（altruism）	配慮（personal consideration）
		自発的援助（voluntary support）
	対人コントロール（interpersonal relationship）	人材活用力（personal management）
		人づきあい（sociability）
		協力（cooperation）
状況対応（situtional）	状況洞察（situational awareness）	決断（decision making）
		楽天主義（optimism）
		気配り（group consideration）
	リーダーシップ（leadership）	集団指導（infleence）
		危機管理（risk management）
	状況コントロール（flexibility）	機転性（tactfulness）
		適応性（adaptability）

いて大きな役割を果たすと提唱している[12)]。一方で、第２期「教育振興基本計画」における「社会を生き抜く力」の補足文には「多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力」とある。本研究では、メイヤーの表現する「実社会で生じる複雑な事象」が、第２期教育計画における「多用で変化の激しい社会」において「生じる事象」と同義であると捉えることで、「社会を生き抜く力」を推し量る指標として、情動知能を手がかりとすることが、十分妥当であると考えた。なお、EQS 調査は、各事業ともに、事業開始直前（Pre）と終了直後（Post）に質問紙を使って実施した。質問紙は、「まったく当てはまらない（０点）」から「よく当てはまる（４点）」の５件法を用いた。また、参加者の心理的な変化を質的側面から調査するために、事業中に感じたことを自由記述させた。自由記述シートは、各事業とも事業１日目終了後に配布し、事業終了時に回収した。

Ⅲ．結果

１．分析方法

（１）EQS 調査

Pre-Post 間の反復要因を独立変数とし、対応領域の合計得点および各領域の下位因子を従属変数とする一要因二水準の被験者内計画における分散分析を行った。統計的有意差の検定には js-STAR2012 を使用し、有意水準は１％未満を有意とした。分析対象は、質問紙への回答に不備があったボランティアを除き、「支援セミナー夏」については 22 名（19.4±1.2 歳）、「支援セミナー冬」については 44 名（19.7±2.3 歳）とした。なお、質問紙の回答において、順序効果の影響を防ぐためにカウンターバランスを施した[13)]。

（２）自由記述調査

自由記述の分析は、記述をテキストデータ化し、テキストマイニングソフト KHcoder を用いて、事業ごとに頻出語を抽出した。また、関連の強い語の結びつきを示す共起ネットワークを作成し、各語の共起関連について分析をおこなった[14)]。

２．結果

（１）EQS の対応領域における分散分析の結果

２つの事業のそれぞれの結果については、表３のとおりである。対応領域ではすべての領域で得点が有意に向上した（支援セミナー夏／冬…自己対応：F（1、21）=8.76、p<0.01／F（1、43）=9.24、p<0.01、対人対応：F（1、21）=14.73、p<0.01／F（1、43）=9.24、p<0.01、状況対応：F（1、21）=9.26、p<0.01／F（1、43）=12.16、p<0.01）。

（２）EQS の対応因子及び下位因子における分散分析の結果

対応因子において支援セミナー夏､冬ともに得点の有意な向上が見られた項目は愛他心、対人コントロール、リーダーシップの３因子であった（支援セミナー夏／冬…愛他心：F（1、21）=9.49、p<0.01／F（1、43）=7.35、p<0.01、対人コントロール：F（1、21）=12.23、p<0.01／F（1、43）=8.25、p<0.01、リーダーシップ：F（1、21）=10.39、p<0.01／F（1、21）=10.87、p<0.01）。

また、下位因子では、熱意と目標追求の因子において支援セミナー夏、冬ともに得点の有意な向上が見られた（支援セミナー夏／冬…熱意：F（1、21）=10.61、p<0.01／F（1、43）=7.62、p<0.01、目標追求：F（1、21）=8.67、p<0.01／F（1、43）=9.47、p<0.01）。

表３　事業毎の分散分析におけるEQSの得点の変化

	体験活動支援セミナー　夏（n=22）				体験活動支援セミナー　冬（n=44）			
	Pre	*SD*	Post	*SD*	F値	Pre	*SD*	Post	*SD*	F値
自己対応領域	45.27	*9.68*	50.77	*10.39*	8.76 **	44.84	*12.95*	49.41	*14.25*	9.24 **
自己洞察	11.95	*3.18*	13.18	*3.50*	4.77	11.61	*4.15*	12.91	*4.24*	7.58 **
感情察知	6.50	*1.90*	6.77	*1.91*	0.66	6.25	*2.40*	7.05	*2.30*	8.25 **
自己効力	5.45	*1.75*	6.41	*2.04*	7.95	5.36	*2.06*	5.86	*2.18*	3.61
自己動機づけ	14.91	*3.79*	16.82	*3.93*	9.92 **	14.48	*4.40*	15.89	*4.98*	6.90
粘り	7.77	*2.23*	8.59	*2.01*	5.81	7.43	*2.25*	8.05	*2.65*	3.66
熱意	7.14	*1.71*	8.23	*2.09*	10.61 **	7.05	*2.46*	7.84	*2.58*	7.62 **
自己コントロール	18.41	*4.36*	20.77	*5.11*	7.84	18.75	*5.52*	20.61	*5.89*	7.74 **
自己決定	5.91	*2.19*	6.68	*2.22*	4.06	6.02	*2.06*	6.55	*2.03*	2.86
自制心	6.68	*1.79*	7.00	*2.24*	1.27	6.84	*2.58*	7.48	*2.58*	4.67
目標追求	5.82	*1.80*	7.09	*2.07*	8.67 **	5.89	*1.98*	6.59	*2.14*	9.47 **
対人対応領域	51.64	*11.18*	57.32	*9.94*	14.73 **	49.70	*14.33*	54.30	*12.46*	9.56 **
共感性	16.86	*3.82*	18.68	*3.48*	8.92 **	16.14	*4.74*	17.52	*4.19*	7.04
喜びの共感	9.23	*2.04*	10.14	*1.71*	8.33 **	8.91	*2.49*	9.50	*2.20*	4.57
悩みの共感	7.64	*2.06*	8.55	*2.19*	5.47	7.23	*2.56*	8.02	*2.31*	7.34 **
愛他心	17.09	*4.00*	18.59	*3.33*	9.49 **	16.64	*4.91*	17.95	*3.91*	7.35 **
配慮	8.50	*2.61*	9.41	*2.01*	9.59 **	8.25	*2.89*	8.98	*2.53*	6.30
自発的援助	8.59	*1.85*	9.18	*1.87*	4.57	8.39	*2.49*	8.98	*1.91*	5.30
対人コントロール	17.68	*5.17*	20.05	*5.08*	12.23 **	16.93	*6.50*	18.82	*5.87*	8.25 **
人材活用力	4.77	*2.21*	5.45	*2.31*	5.84	4.25	*2.37*	5.00	*2.16*	6.18
人付き合い	5.77	*2.15*	6.32	*1.92*	4.37	5.52	*2.65*	6.05	*2.25*	4.50
協力	7.14	*1.82*	8.27	*1.79*	8.00	7.16	*2.41*	7.77	*2.13*	6.82
状況対応領域	38.14	*13.54*	42.14	*12.24*	9.26 **	37.48	*14.51*	42.18	*14.24*	12.16 **
状況洞察	18.32	*6.17*	19.50	*4.67*	3.30	17.41	*6.12*	19.20	*6.75*	7.81 **
決断	4.68	*2.53*	5.32	*2.44*	4.55	4.50	*2.05*	5.45	*2.37*	11.35 **
楽天主義	6.27	*2.45*	6.50	*1.97*	0.67	5.80	*2.78*	5.98	*2.97*	0.41
気配り	7.36	*2.10*	7.68	*1.89*	0.58	7.11	*2.32*	7.77	*2.31*	7.76 **
リーダーシップ	8.55	*4.34*	10.18	*4.51*	10.39 **	8.91	*4.43*	10.34	*3.95*	10.87 **
集団指導	3.77	*2.61*	4.68	*2.64*	6.38	4.00	*2.50*	4.95	*2.42*	14.38 **
危機管理	4.77	*1.98*	5.50	*2.25*	4.85	4.91	*2.25*	5.39	*1.85*	3.39
状況コントロール	11.27	*3.79*	12.45	*3.85*	6.37	11.16	*4.76*	12.64	*4.34*	11.70 **
機転性	5.36	*1.99*	6.09	*2.15*	4.85	5.50	*2.56*	6.11	*2.30*	5.38
適応性	5.91	*2.02*	6.36	*2.06*	2.85	5.66	*2.39*	6.52	*2.32*	13.68 **

***p<0.01*

それぞれの事業の特徴的な結果として、支援セミナー夏では対応因子の自己動機づけ、共感性が有意な得点の向上を示し、下位因子においては喜びの共感、配慮の項目において得点の有意な向上が見られた（自己動機づけ：F（1、21）=9.92、p<0.01、共感性：F（1、21）=8.92、p<0.01、喜びの共感：F（1、21）=8.33、p<0.01、配慮：F（1、21）=9.59、p<0.01）。

一方、支援セミナー冬は、支援セミナー夏に比べて状況対応領域の因子に影響が見られた。具体的には、対応因子における状況洞察及び状況コントロールに変化が見られた（状況洞察：F（1、43）=7.81、p<0.01、状況コントロール：F（1、43）=11.70、p<0.01）。下位因子では決断、気配り、集団指導、適応性の因子において得点に有意な向上が見られた（決断：F（1、43）=11.35、p<0.01、気配り：F（1、43）=7.76、p<0.01、集団指導：F（1、43）=14.38、p<0.01、適応性：F（1、43）=13.68、p<0.01）。加えて、自己対応領域の対応因子における自己洞察、自己コントロールと下位因子における感情察知、さらに対人対応領域における悩みの共感の因子の得点においても有意な向上が見られた（自己洞察：F（1、43）=7.58、p<0.01、自己コントロール：F（1、43）=7.74、p<0.01、感情察知：F（1、43）=8.25、p<0.01、悩みの共感：F（1、43）=7.43、p<0.01）。

（３）自由記述の分析の結果

自由記述の解析を行った結果、「支援セミナー夏」は 764 語、「支援セミナー冬」は 879 語が抽出された。事業ごとの頻出上位 30 語と共起ネットワークを表４、図３、図４に示す。

表４　自由記述における頻出上位 30 語

体験活動支援セミナー夏

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子供	79	人	13
思う	54	ボランティア	12
自分	37	楽しい	12
行動	23	声	12
班	22	話	12
見る	20	持つ	11
感じる	19	レクリエーション	10
子	17	対応	10
言う	16	今日	9
大切	16	体験	9
活動	15	明日	9
説明	15	安全	8
難しい	15	意識	8
考える	14	楽しむ	8
気	13	緊張	8

体験活動支援セミナー冬

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子供	190	たくさん	21
自分	101	大切	20
思う	76	話す	20
活動	68	一緒	19
楽しい	51	話しかける	19
楽しむ	46	ボランティア	18
考える	41	体験	18
見る	32	良い	18
班	30	緊張	17
感じる	27	最初	16
人	26	今	15
関わる	25	持つ	15
コミュニケーション	24	時間	15
言う	23	笑顔	15
話	22	声	15

Ⅳ．考察

EQS の領域および因子得点の分析結果と、自由記述の分析結果から２つの事業を考察する。共起ネットワークの構成は、活動プログラムの違いはあるが類似点が多く見られた。共起の中心は、両事業とも「子供」であり、支援セミナー夏・冬ともに最も多く抽出された語であった。支援セミナーは、実際に小学生を対象としたキャンプの運営をするプログラムであり、子供と接する体験を起点にボランティアの思考がさまざまな方向に展開していることが推察される。

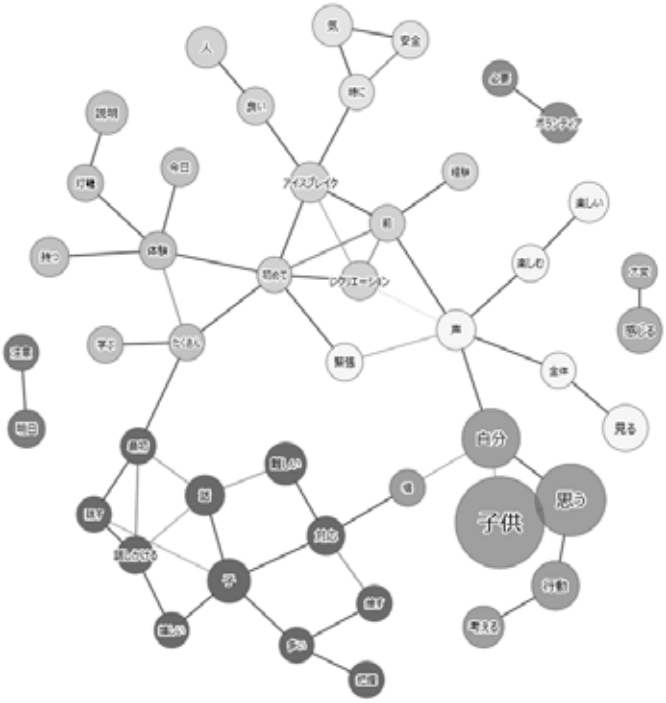

図３　支援セミナー夏　共起ネットワーク

また、「支援セミナー夏」と比較して「支援セミナー冬」に多く出現している語として「楽しむ」「楽しい」といった語と「関わる」「コミュニケーション」といった語が挙げられる。この２種類の語について考察する。

まず、「楽しむ」「楽しい」は、「自分自身が楽しまないと始まらない、と思い出した」「自分が楽しまないと、子供が楽しめないのだ」「楽しんで良いのは子供だけじゃないのだと思った」「雪遊びは楽しかった」「楽しく安全に遊ぶためには」等の文脈で使用されていた。「支援セミナー冬」に参加したボランティアは、子供を安全に楽しませることはもちろん、自分自身が楽しむことが大切であると感じている傾向があると考えられる。

一方、「関わる」と「コミュニケーション」は、ほぼ同様の意味合いで使用されていたが、「関わる」は主に「班付スタッフ」として「子供」と関わることに関する記載に多く、「コミュニケーション」はボランティア同士のかかわりに関する記載に多く見られた。「支援セミナー冬」では、子供との関わりが意識されるとともに、ボランティアスタッフ同士でのコミュニケーションの機会が多く見られる傾向があると考えられる。この傾向は、状況対応領域の向上という EQS 調査の結果から、状況洞察や状況コントロールの向上と関係していると推察される。

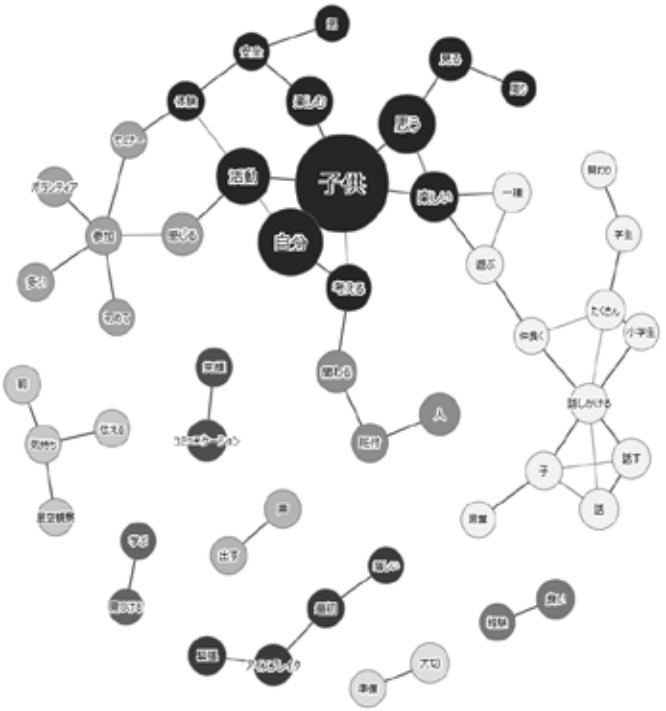

図４　支援セミナー冬　共起ネットワーク

EQS 調査では「支援セミナー夏」「支援セミナー冬」共に自己対応領域の得点が上昇しており、子供との関わりがボランティアの自己と向き合う力の向上につながっていると考えられる。また、下位因子のうち「熱意」は「支援セミナー夏」「支援セミナー冬」共に得点が向上しているが、内山は、「熱意は『意気込みの強さ』であり、黙々と努力を重ねる力を示す」と述べており[15]、教員志望の学生が多い岩手山交流の家のボランティアにとって支援セミナーは子供と関わる体験ができる「本物」の教育現場として映り、「自己実現に直結する」と感じたことで「熱意」に好影響を及ぼしたと推察できる。

さらに、「共感性」や「愛他心」を対応因子とする対人対応領域の得点も「支援セミナー夏」「支援セミナー冬」共に向上している。内山は、共感性を「他者の感情に関する認知や共有をベースに、他者との人間関係を適切に維持することのできる能力」、愛他心を「他者を思いやる気持ち」として、「愛他心」が実際の援助行動の起点となるのに対して「共感性」は感情レベルの反応で援助行動の基礎となるものであると述べている[16]。また、下位因子のうち「支援セミナー夏」では「喜びの共感」が向上し、「支援セミナー冬」では「悩みの共感」が向上しているが、職員主導の部分が多い「支援セミナー夏」では活動プログラム間のつなぎの役割を経験豊富な交流の家職員が担っていたため比較的易しい成功体験を得ていた可能性がある一方、「支援セミナー冬」では従来は交流の家職員が担っていた役割をボランティア自身が乗り越える必要があり、「支援セミナー夏」よりも複雑かつ高度な課題が多く存在したことが「悩みの共感」に影響したと考えられる。

「支援セミナー冬」の特筆すべき点として、「気配り」の向上が挙げられる。内山は、気配りは「時間的空間的に広がっており、特定個人を考慮する能力を基礎にして『場全体』の認識のうえに行われる行動の制御である」と述べている[17]。この能力は、平成 27 年の及川の報告の対象事業においても、本研究の対象事業のうち「支援セミナー夏」においても向上が見られなかった能力であり、非常に高度な能力であると推察できる。加えて、「支

援セミナー冬」の共起ネットワークにおいて「関わる」や「コミュニケーション」が頻出していることも「気配り」の向上に関係していると考えられる。

「支援セミナー」の組織体制は、ボランティアが主体的な運営をすることで「社会を生き抜く力」を高められると考えて構築されたものであるが、「気配り」の能力向上は「支援セミナー夏」に比べて「支援セミナー冬」におけるより主体的な組織体制の教育効果を象徴する結果であるといえる。

Ⅴ．結論

本研究は、及川の平成 27 年度の報告をもとに、岩手山交流の家における法人ボランティアの組織キャンプの企画・運営体験の組織体系に着目することで、企画・運営を行うことで得られるどのような体験が「社会を生き抜く力」の養成につながるのかを明らかにすることを主たる目的して研究を行った。その対象として、岩手山交流の家で実施しているボランティアを対象としたフォローアップのための教育事業である「支援セミナー夏」及び「支援セミナー冬」において、ボランティアが主体となって事業の企画・運営をする点に着目して調査及び分析を行った。

本研究では、ボランティアの企画・運営体験のどの要因が「社会を生き抜く力」の養成に寄与しているのかを明らかにするために、職員主導とボランティア主導の２つの異なる組織体制について分析を行った。自由記述の結果は、「支援セミナー夏」に比べて「支援セミナー冬」の方が、ボランティア同士が関わる機会が多くなることが推察され、その結果として「時間的空間的に広がっており、特定個人を考慮する能力を基礎にして『場全体』の認識のうえに行われる行動の制御」である「気配り」の能力向上に繋がることが示唆された。

以上の結果から、ボランティアがより主体的に運営する組織体制を敷くことで、情動知能の諸能力が向上し、ひいては「社会を生き抜く力」の養成に繋がっていく可能性があるといえる。また、本研究は、教育事業に参画するボランティアにとって、主体的に事業を企画・運営する体験が直接的な利益を生む可能性を示したものであるが、平成 27 年の及川の報告と合わせ、本研究の結果を受けて岩手山ビジョンの社会的意義がさらに高められたといえる。

Ⅵ．今後の展望

本研究の結果から、岩手山ビジョンの改訂版の策定に繋がる知見を得ることができた。具体的には、「育成の起点」から段階的にボランティアを自主事業の企画・運営に参画する仕組みを作ることで、「持続可能な育成スキーム」として構築ができると考えられる。岩手山交流の家では、本研究で示された知見を受けてすでに「岩手山ボランティア育成ビジョン・改訂版」（岩手山ビジョン 2015）を策定している。このビジョンに基づき、ボランティアが主体的な企画・運営に取組む教育事業として、ボランティアがチームを組んで自主企画事業を展開する「ボランティア・ブラッシュアップ・プロジェクト」を立ち上げており、その成果についても検証していく予定である。

引用文献・参考文献・注

１）国立岩手山青少年交流の家「岩手山ボランティア育成ビジョン」は、平成 27 年度国立岩手山青少年交流の家所報に掲載されている。

２）教育事業とは、国立青少年教育振興機構における、青少年の課題や国の政策課題に対応しつつ、関係機関・団体と連携して、立地条件および地域特性やニーズに対応した、青少年の体験活動事業や青少年教育指導者などの養成研修事業などを指す。

３）及川未希生「青少年教育施設におけるボランティア養成に関する研究―岩手山ボランティア育成ビジョンを例にあげて―」『青少年教育研究センター紀要第４号』2016、pp.32-41.

４）前掲書３）

５）及川未希生・庄子佳吾・志賀亮太・伊藤緑「国立青少年教育振興機構におけるボランティア養成に関する研究―ヒューマンコミュニティ創成マインドに着目して―」『青少年教育研究センター紀要第２号』2013、pp.115-124.

６）及川未希生・伊藤緑「グループワークを中心とした大学生の自己啓発キャンプがヒューマンコミュニティ創成マインドに及ぼす影響」『日本野外教育学会第 15 回大会プログラム・研究発表抄録集』2012、pp.92-93.

７)神戸大学大学院人間発達環境学研究科「ヒューマンコミュニティ創成マインドとは？」、http://gph.h.kobe-u.ac.jp/58.html、平成 28 年２月 29 日参照。

８）国立岩手山青少年交流の家『体験活動支援セミナー　ドキドキ、ワクワク、ボランティア・夏　報告書』2014.

９）国立岩手山青少年交流の家『体験活動支援セミナー　ドキドキ、ワクワク、ボランティア・冬　報告書』2015.

10）内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子『EQS マニュアル』８版、実務教育出版、2001.

11）ゴールマン,D.／土屋京子訳『EQ―心の知能指数』第 13 版、講談社、1996.

12）Salovey,P. & Mayer,J.D, “ Emotional intelligence ”,Imagination,Cognitio & Personality, 9th, 1990, pp.185-211

13）カウンターバランスとは、回答における順序効果を相殺するための手法である。本稿では、回答者を２グループに分け、一方は正順序で回答する質問紙を使用し、もう一方は逆順序で回答する質問紙を使用した。

14）樋口耕一「KHcoder」、http://khc.sourceforge.net/、平成 27 年２月 19 日参照。

15）16）17）内山喜久雄「領域、対応因子、下位因子がもつ意味」前掲書 10)、pp.15-21.